

平成27年3月12日

平成26年度（第65回）芸術選奨文部科学大臣賞 及び同新人賞の決定について

文化庁では、昭和25年から毎年度、芸術各分野において、優れた業績を挙げた方、又は新生面を開いた方に対して、芸術選奨文部科学大臣賞、同新人賞を贈っています。このたび、本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

1. 趣旨

芸術各分野において、優れた業績を挙げた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞を贈ることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

2. 部門・贈賞

演劇、映画、音楽、舞踊、文学、美術、放送、大衆芸能、芸術振興、評論等、メディア芸術の11部門にて実施。受賞者には賞状と、大臣賞には30万円、新人賞には20万円の賞金が贈られます。

3. 贈呈式

3月18日（水）午後4時から、都市センターホテル（東京都千代田区平河町2-4-1）において行います。

※取材を希望される場合には、事前登録をお願いします。下記の担当まで御連絡ください。

＜担当＞文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室
室長補佐 鈴木康彦（内線2831）
活動奨励係長 下大田淳人（内線2832）
電話：03-5253-4111（代表）
03-6734-2835（夜間直通）

平成26年度(第65回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞:18名 文部科学大臣新人賞:11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	なかむら かるく 中村 歌六	歌舞伎俳優	いがごえどうちゆうすごろく 「伊賀越道中双六」山田幸兵衛ほかの演技
		ながい あい 永井 愛	劇作家・演出家	おつがいの かいだん 「鷗外の怪談」の成果
	新人賞	かたやま くらう えもん 片山 九郎右衛門	観世流能楽師シテ方	あおいのうえ 能「葵上」ほかの成果
映画	大臣賞	おのでら おさむ 小野寺 修	録音監督	さくろざか あだうち 「柘榴坂の仇討」の成果
		こいずみ たかし 小泉 堯史	映画監督	ひぐらし 「鯛ノ記」の成果
	新人賞	お みの ぼ 奥 美保	映画監督	「そのみにて光輝く」の成果
音楽	大臣賞	きよもと よしじゆだゆう 清元 美寿太夫	清元節唄方	「月」「隅田川」の演奏
		ふくい けい 福井 敬	声楽家	歌劇「ドン・カルロ」の歌唱
	新人賞	しんない たけし 新内 剛士	新内節演奏家	「新内剛士の会」ほかの成果
舞踊	大臣賞	あづま せつほ 吾妻 節穂	舞踊家	清元 たまうさぎ 清元「玉兔」ほかの演技
		ほりうち げん 堀内 元	米セントルイス・パレエ芸術監督	「堀内元パレエUSA V」の成果
	新人賞	やまだ うん 山田 うん	振付家・ダンサー	「十三夜」ほかの成果
文学	大臣賞	でくね たつろう 出久根 達郎	作家	たんべんしゅう 「短篇集 半分コ」の成果
	新人賞	なか かんせん 仲 寒蟬	俳人	句集「巨石文明」の成果
美術	大臣賞	さとう ときひろ 佐藤 時啓	写真家・美術家・東京藝術大学教授	「佐藤時啓 光一呼吸 そこにいる、そこにはいない展」の成果
		なかむら かずみ 中村 一美	多摩美術大学教授	「中村一美展」の成果
	新人賞	さいとう ただし 齊藤 正	建築家	「HANCHIKU HOUSE」の成果
放送	大臣賞	おかだ よしかず 岡田 恵和	脚本家	「さよなら私」ほかの成果
	新人賞	たなか ただし 田中 正	ディレクター	「足尾から来た女」の成果
大衆芸能	大臣賞	しゅんぶうていこあさ 春風亭 小朝	噺家	「春風亭小朝 in 三座」の成果
		やました たつろう 山下 達郎	シンガー・ソングライター	「山下達郎 Maniac Tour～PERFORMANCE 2014～」の成果
	新人賞	かつらきちや 桂 吉弥	落語家	はなしか 「噺家生活20周年記念 桂吉弥独演会」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	やまの しんご 山野 真悟	黄金町バザールディレクター	「黄金町バザール2014 仮想のコミュニティ・アジア」の成果
	新人賞	うえだ かなよ 上田 假奈代	詩人・詩業家	「釜ヶ崎芸術大学2014」ほかの成果
評論等	大臣賞	おさき まりこ 尾崎 真理子	読売新聞編集委員	「ひみつの王国 評伝 石井桃子」の成果
		のむら まさと 野村 正人	学習院大学教授	ふうし 「諷刺画家グランヴィル テキストとイメージの19世紀」の成果
	新人賞	まえだ きょうじ 前田 恭二	読売新聞文化部次長	「絵のように 明治文学と美術」の成果
メディア 芸術	大臣賞	たかたに しろう 高谷 史郎	アーティスト	個展「明るい部屋」ほかの成果
	新人賞	きしもと まさし 岸本 斉史	漫画家	「NARUTO-ナルト-」の成果

※敬称略・部門内50音順・受賞者名の下線は女性

平成26年度(第65回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	中村 歌六	芸力充実の中村歌六氏が本年は満を持して最高級の演技を見せた。「梅雨小袖昔八丈(つゆこそでむかしはちじょう)」の弥太五郎源七は衰残の侠客(きょうかく)ながら、燃え尽きぬ男の色気と鬱情が強烈。「鬼一法眼三略巻(きいちぼうげんさんりやくのまき)／菊畑」の鬼一は竹本と自在に呼応する感興の中に複雑な性根を蓄え、詰んだ息に支えられたコトバの密度が無類に濃い。中でも傑作は「伊賀越道中双六／岡崎」の山田幸兵衛で、上記二役の特長がここに凝って一丸となった。重厚な一幕を通じて諸役と対峙(たいじ), 文字どおり要たり得た存在感は輝かしい。蒼古(そうこ)たる格調と役者らしい愛嬌(あいきょう)。堅固な身体技と鉄壁のセリフ術。今後老熟の豊年に向けて後進へ模範を示す役割も大いに期待される。
演劇	永井 愛	永井愛氏は、主宰する二兎社(にとしゃ)公演「鷗外の怪談」の作・演出で快作を産み出した。文学者であり陸軍軍医総監の立場の森鷗外とその一家、知人・友人ら登場人物七人の細部にまで目を配らせた劇作術は見事だった。自由奔放な二度目の若い妻、軍医・家長として家を守れという老いた母と嫁との確執や永井荷風、大逆事件の被告の弁護士が押しかけて筆が進まない鷗外。軍医、文学者の二面性を抱える知識人をユーモアを湛(た)えた人間喜劇として造形していたのは高く評価される。
映画	小野寺 修	小野寺修氏は昭和44年日活入社以来、名匠橋本文雄氏の薫陶を受け、映画録音技師として百二十本以上の作品に携わってきた。言うべきセリフや音を心地好く聴かせながらもあるべき音を大胆に省略し、効果音・音楽・生の声を繊細に操りながら「映画」の文字・絵を見事な音としてよみがえらせ感動をより深いものへと導いていく手腕は誰もが認めるところである。「柘榴坂の仇討」もそのこだわりを十分に発揮した作品である。
映画	小泉 堯史	小泉監督作品「蝸ノ記」は、多様化している映画作品の中で、骨太のしっかりしたドラマ構成と人物描写で、日本映画の存在を改めて大きく高めた。藩史の編さんを仕上げるまでは切腹を免れている男と、彼の作業を監視している男とのヒューマンドラマで、平成24年直木賞を受賞した葉室麟(りん)氏の同名原作の映画化である。氏は、黒澤明監督「影武者」から「まあだだよ」まで五本の作品に助監督として参加し、黒澤監督の遺稿を映画化した「雨あがる」で監督デビュー。登場人物の人柄、性格をしっかりと描くことなど、観客が映画を楽しめることのエンターテイメント性と芸術性を演出できる監督である。
音楽	清元 美寿太夫	清元美寿太夫氏は、歌舞伎・日本舞踊の伴奏音楽において、また純音楽鑑賞の素浄瑠璃の会において、常に清元節ならではの味わいと優れた技量を発揮し、斯界(しかい)の実力者として活躍している。その節回し、詞、緩急・強弱の変化の妙など、近年更に円熟味を増している。清元美治郎氏との第2回「二人会」では、調絃(ちょうげん)変化が多く技巧的ながら叙情的な昭和の名品、清元栄寿郎作曲の「月」と、狂乱の母がさらわれた我が子を訪ね、その死を知り悲しむ、能に取材した格調ある明治の傑作、二世清元梅吉作曲の「隅田川」を取り上げ、清元節の多彩で奥行きある表現で聴衆を魅了し、高く評価された。
音楽	福井 敬	福井敬氏は抜群の歌唱力と演技力によって、日本のオペラ公演の水準を高めるけん引役を果たしてきたテノール歌手である。本年は東京二期会によるヴェルディの「ドン・カルロ」でタイトル・ロールを演じ、際立って充実した歌唱で圧倒。東京フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会ではミハイル・プレトニョフ指揮の下、スクリャービンの交響曲第1番でソリストを務め、壮麗なオーケストラに支えられながら芸術賛美を朗々と歌い上げた。

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	吾妻 節穂	吾妻節穂氏の「玉兔」の演技は、「素踊り」で、江戸幕末期の歌舞伎興行で上演された七変化所作事「月雪花名残文台(つきゆきはななごりのぶんだい)」の一コマを題材にしている。「素踊り」は、江戸期「着流し所作」と呼ばれ、歌舞伎役者や花街、庶民の稽古事として親しまれた江戸の地の踊りが基で、座敷から舞台芸となって百年を過ぎた「舞踊」のことである。重要無形文化財保持者らの多くの舞踊衆は「素踊り」を得意芸とし、伝承・創造している。氏の「玉兔」などの「素踊り」は、伝承芸に清楚(せいそ)で闊達(かつたつ)な個性が冴(さ)えて賞賛に価する出来栄であった。
舞踊	堀内 元	ニューヨーク・シティ・バレエ団の東洋人初のプリンシパルとして活躍した堀内元氏は、在団中から日本初の非営利バレエ公演を実現するなど、常に先駆者として舞踊界に刺激を与えてきた。平成12年に現職に就任後は、振付、指導、運営と多才ぶりを発揮。平成22年から開始の兵庫県立芸術文化センター主催の「堀内元バレエUSA」シリーズでは、既成の枠組みや地域、世代を超えたプロフェッショナルな舞台を実現すると同時に、日米の文化交流に貢献した。本年は、自作のほかに、バランシン、トワイラ・サープらの作品を加え、より一層の成果を挙げた。
文学	出久根 達郎	<p>短篇小説は、人の世の苦楽を味わい、年季が入った作家がなす領域と、「短篇集 半分コ」の仕上がりの妙に思う。</p> <p>落語の話藝(わけい)に通じる語り口である。落語の落ちと同じく、短篇小説は最後の締めで決まる。出久根達郎氏は夏目漱石を愛読している。漱石は明治の作家には珍しく落語を好んだ。これは漱石仕込みと思える。また、短篇小説は俳句に似ている。氏も季節に市井の人情を詠む。切れ味の良さはこれによる。嗜(たしな)んでいたものが蓄えられ、言葉を磨いて珠玉の短篇となった。</p> <p>函(はこ)入り、布表紙、背には朱の短冊に金の箔(はく)押しの書名。確かな造本である。年配の方はもとより、若い人にも薦めたい。</p>
美術	佐藤 時啓	佐藤時啓氏は、ペンライトや鏡を使って長時間露光をしているフィルムに行為の軌跡を刻印してゆく「光—呼吸」シリーズ、複数のピンホールを持つ自作カメラによる360度のパノラマ写真の「Gleaning Lights」シリーズ、人が中に入れる移動式カメラ・オブスキュラを使った「Wandering Camera」シリーズなどによって、写真が人間の身体感覚をどのように変容させてきたかを見事に視覚化してきた。今回の東京都写真美術館での個展は、その集大成として高く評価すべきものである。
美術	中村 一美	フォーマリズム絵画の超克(ちょうこく)を自らの課題とする中村一美氏は、アメリカの戦後絵画や、ときには日本・中国の古画に独自の解釈や思索を織り込みながら、長大な連作群を制作してきた。本年、国立新美術館で開かれた「中村一美展」は、氏の創作活動を集大成する回顧展であるとともに、大画面の「存在の鳥」18点による意欲的な近作発表の機会ともなり、「個々の作品の差異を通じて一個の意味の場を開示する」という積年の絵画思想の成果を見事に示した。
放送	岡田 恵和	<p>岡田恵和氏の脚本の魅力は、緻密な構成もさることながら、卓越した科白(せりふ)の巧(うま)さにある。</p> <p>受賞対象作品のみならず、ジャンル、テーマにかかわらず、機知に富んだ科白の応酬は、瞬間に観る者をそのドラマ世界に引き込んでしまう。</p> <p>ときにけれんとも思わせるが、その中にも物事の本質を突く氏の視点の鋭さを垣間見(かいまみ)る。</p> <p>ドラマは全く絵空事なのに、見終えた時、観る者はそこにリアリティを実感してしまう。</p> <p>氏のここ数年の大活躍は贈賞に十分価するものである。</p>

部門	受賞者名	贈賞理由
大衆芸能	春風亭 小朝	春風亭小朝氏が中心となって企画・運営したかつての「大銀座落語祭」「東西落語研鑽(けんさん)会」などは、東西の別なく落語の活況への大きな礎となり、各地で地域振興の落語会が次々と生まれた。この間、自らは各所における定例の活動が主であったが、今年度は東京・明治座、福岡・博多座、大阪・新歌舞伎座での「春風亭小朝独演会in三座」を催行、出演した大河ドラマの役作りにも、大きな力と可能性を見せた。益々の研鑽、業界貢献の期待をもって贈賞する。
大衆芸能	山下 達郎	山下達郎氏は「Maniac Tour～PERFORMANCE 2014～」において、近年演奏する機会がなかった作品を主体としたツアーを実施。これまでのライブ同様、録音化された作品とは別個に、バンドを率いての生演奏による自然発生的な要素を加味した柔軟な演奏を展開。とりわけ評価の高い歌唱をはじめ、充実した音楽内容はより完成度を高め、際立つ個性とその存在感を示した。「クリスマス・イブ」に代表されるこれまでのシンガー・ソングライターとしての実績や、竹内まりや作品における制作者としての手腕に加え、ポップス史研究者として一般への紹介における貢献など、今後、多方面での一層の活躍が期待される。
芸術振興	山野 真悟	山野真悟氏は、平成2年の福岡での「ミュージアム・シティ・プロジェクト」以来、日本における「まちとアート」をつなぐムーブメントの先駆者で、平成20年より活動拠点を横浜に移し、「黄金町バザール」ディレクターに就任した。黄金町界隈(かいわい)の特殊飲食店跡やガード下などの施設に内外のアーティストの滞在型制作による作品の展示を基本とするこの企画は、今年度、「横浜トリエンナーレ」及び「東アジア文化都市」の一環として、「仮想のコミュニティ・アジア」をテーマに、国際美術展としての新段階を画するものとなり、大きな実りを結んだ。
評論等	尾崎 真理子	尾崎真理子氏の「ひみつの王国 評伝 石井桃子」は、児童文学の創作者、翻訳者、編集者として日本の児童文化の世界に多大な貢献を果たした石井桃子氏の本格的な評伝である。長い間、新聞の文芸記者として活躍してきた氏は、その取材力、調査力、そして文筆力を駆使して、石井桃子という文学者の「ひみつの王国」を余すところなく解明してみせてくれた。その筆致には評伝の対象への傾倒と愛情が深くみなぎっており、評伝文学の一つの到達点を示している。芸術選奨文部科学大臣賞にふさわしいものである。
評論等	野村 正人	19世紀フランスの諷刺画家グランヴィルを知る人は少ないが、そのカリカチュアの類いまれな魅力と意義を本書は余すところなく伝える。挿絵の地位向上を目指す特異な人物の生涯を語り、判じ物めいた挿絵や諷刺画を丁寧に解説し、当時の出版、視覚文化との密接な関係を解明する叙述の背後には堅実な学識と研鑽がある。文学と視覚芸術にまたがる豊穡(ほうじょう)な研究成果であり、カリカチュアこそフランス文化の伝統だと教えてくれる好著でもある。
メディア芸術	高谷 史郎	高谷史郎氏は、個展「明るい部屋」において、写真を起点とする光学的な複製技術画像の成立過程そのものを考察の対象にし、ピントグラスからフルハイビジョン映像まで、画像を成立させている表象技術と知覚の関係性を、表現の内部から思考した作品群を発表した。静止的現象から可読的知覚を超えた動的な時間性に至る幅広いレンジを、映像／音響を駆使して相互参照的に展開するもので、メディア史の批評性を展覧会全体構成に内在させる精緻かつ高完成度のクリエーションとして稀有(けう)な試みと評価できる。集団制作や、数々の多領域コラボレーションを含めたこれまでの活動の集大成が反映された成果となった。

平成26年度(第65回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	片山 九郎右衛門	片山九郎右衛門氏は近年、傑出した舞台を創り続けている。平成26年は「葵上」(「梓之出(あずさので)」「空之祈」の小書付き)でシテ・六条御息所(ろくじょうのみやすどころ)の気品と恨みなどを十分に表現し、実力を示した。底に力強さのこもる謡、鋭い体のキレは緊迫感あふれ、鮮やかな舞台であった。また「吉野琴」復曲に取り組み、世阿弥(ぜあみ)の「却来華」などに名のみ残る「天女の舞」を復活するなど成果も挙げた。修業の花が開くまで何十年も要する能だが、その卓抜な技量は顕彰にふさわしい。
映画	呉 美保	自主映画時代から、呉美保氏は一貫して、家族の形を描き、観客の支持を集めてきた。3作目の長篇(ちょうへん)劇映画「そのみにて光輝く」では、天逝(ようせい)した佐藤泰志(やすし)氏の小説を原作に、更に人間観察を掘り下げ、漂泊する登場人物たちの心理を通して、普遍的な愛の形を抽出することに成功した。一見すると、ざらついた人間同士の絆(きずな)を、硬質な文体で捉え、優しさをにじませた演出力は、既に海外でも高く評価されている。世界に羽ばたく新たな才能として、今後の活躍が期待される。
音楽	新内 剛士	新内剛士氏は、このところ声に伸びが出、甲乙ともに安定し、表現幅が増してきており、その成長と活躍は目覚ましいものがある。「新内剛士の会」では、聴きどころのみを連ねるのではなく、曲に真正面より取り組み、その劇的性格を浮き彫りにする姿勢に好感が持てる。段物「不断桜下総土産(ふだんざくらしもうさみやげ)」「(佐倉宗吾郎)では「住家の段」から「子別れの段」を演じ、夫婦、親子の情愛を生々と描き出した。また、舞踊・邦楽による特集「道成寺(どうじょうじ)の世界」での「日高川」の語りも強い印象を与えた。創作にも意欲を示し、古典の伝承とともに更なる発展を志向し、将来が大いに期待される。
舞踊	山田 うん	山田うん氏の最近の業績は目覚ましい。昨年の「ディクテ」は同名のテレサ・ハッキョンチャの自己解体的文学をテキストとしてダンス・演劇を脱構築する出色の作品だったが、それが偶然の成功でないことが本年の「春の祭典」や「十三夜」によって証明された。前者は迫力に満ちた身体による正攻法の群舞、後者は軽やかに観客の予測をはぐらかしてゆく緻密な構築と、異なるスタイルを選びながらいずれも舞踊界における大きな収穫となった。
文学	仲 寒蟬	平成17年の角川俳句賞受賞以来、佐久の地にあつて、大胆かつ繊細な作品を発信し続けてきた作者の第二句集。書名ともなった「巨石文明滅びてのこる冬青空」などのスケールの大きさが一つの特徴であるが、「或(ある)部屋は蚊取線香のみ点(とも)す」の日常詠の濃(こま)やかさ、「時間差で来る蛸(ひぐらし)のさびしさは」に見える抒情(じょじょう)、「茸(きのこ)汁化かされさうな食堂」のユーモアなど、作品は多様。さらに真摯な社会詠も多く、俳句形式をもって幅広く世界を抱擁する一集となっている。
美術	齊藤 正	齊藤正氏は丸亀市を拠点に活躍する建築家で、地元で昔栄えた塩飽(しわく)大工を再組織化し、東日本大震災支援のために「ZENKON湯」という名の風呂を被災地に17棟建設したり、瀬戸内国際芸術祭では建築素材の乏しい地で、土と海で採れる苦汁(にがり)と消石灰を混ぜて突き固めて構築する「版築」という今はほとんど見られない工法をセルフビルドで実現し、その成果をHANCHIKU HOUSEに結実させている。さらにエボラウィルス対策グッズ開発など常に芸術活動を通じて社会に貢献する姿勢が高く評価された。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	田中 正	<p>「足尾から来た女」は無名の女性を主人公にして、日本の公害の原点とされる足尾銅山鉱毒事件の実相に迫った。村民が故郷を追われた栃木・谷中村の悲劇は、福島原発事故の被災地を連想させる。田中正氏は、現代にも通じるメッセージを込めたこの意欲作を自ら企画し、池端俊策氏の脚本を得て見事に映像化した。明治後期の東京と農村を丁寧に再現し、多彩な人物群像を印象深く描いた演出力は特筆される。その志の高さも評価したい。</p>
大衆芸能	桂 吉弥	<p>桂吉弥氏にとって、平成26年はまさに飛躍の年だった。中でも、独演会で見せた「植木屋娘」は滑稽味の中に親子の情愛を巧みに表出。また、噺家生活20周年記念の会は、仕種(しぐさ)も美しい「七段目」で魅了し、「地獄八景亡者戯(じごくはつけいもうじゃのたわむれ)」では遊び心も満載にダレ場のない構成で1時間15分を演じ切る。端正な語り口ながら、優等生的印象だった従来の高座に、氏自身の人となりも素直ににじみ出て、塩梅(あんばい)の良い毒気と艶も加わり、芸の幅が格段に広がった。硬軟併せ持つスケールの大きな噺家として、今後の活躍が期待される。</p>
芸術振興	上田 假奈代	<p>自らも詩人である上田假奈代氏は、平成15年、NPO法人「こえとことばとこころの部屋」を立ち上げた。現在は、日雇い労働者の町・釜ヶ崎(大阪)で運営するカフェ・コロールを拠点に、表現行為を通じた居場所づくりや生きがいづくりに取り組んでいる。アートによる社会包摂という概念が一般的でない頃から、地域社会で特色ある活動を継続してきた点は高く評価できる。平成26年には「横浜トリエンナーレ」への参加など新しい展開も見られた。</p>
評論等	前田 恭二	<p>明治期の文学と美術を同時に視野に収めた本書は新鮮な力作である。当時の文学者たちが「美術」をいかに意識し、語り、作品に組み込んだのかを、裸体画や写生、骨董(こつとう)や浮世絵などのテーマをめぐり詳細に検証した。膨大な調査と達意の文章を通して、人間関係の相克が浮かび上がり、作品の意想外なつながりが見え、通説を覆す論述が光彩を放つ。明治文学を美術の視点から再読し、そのリアリティを蘇生(そせい)させた手腕は高い評価に値する。</p>
メディア芸術	岸本 齊史	<p>王道の少年マンガの要素である「挑戦、成長、戦い、友情と仲間の力」に奥行きを与える要素として「民間伝承や歴史や東洋文化の香り」を見事なバランスで組み込んで独自の宇宙観を生み出している。秀逸なキャラクター造形で描かれる登場者の多くが戦いに対して考え、悩み、対話を求める。世界がナルトに魅(み)せられるのはこの「対話しようとする主人公の姿勢」にあるのではないかと、より良き未来のために、ナルト万歳！</p>

平成26年度(第65回)芸術選奨
選考経過

平成26年度(第65回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
演劇	<p>今年度は選考審査員、推薦委員より文部科学大臣賞候補として12名、文部科学大臣新人賞候補として10名が推挙された。伝統芸能は演技者が、現代演劇は作・演出スタッフが多く推挙されたのが特徴である。第一次選考審査会では、対象となる個別の作品の実績について活発に議論が行われ、文部科学大臣賞候補として伝統芸能3名、現代演劇2名、文部科学大臣新人賞候補として、伝統芸能1名、現代演劇2名を対象として残すこととなった。</p> <p>第二次選考審査会では文部科学大臣賞候補として、改めて評価が行われ、伝統芸能から、歌舞伎「伊賀越道中双六」の山田幸兵衛ほかの優れた演技が評価され五代目 中村歌六氏が推挙された。次いで、現代演劇から、永井愛氏作・演出の「鷗外の怪談」が評価され、両名の文部科学大臣賞受賞が決定した。文部科学大臣新人賞については、伝統芸能の1名と現代演劇1名が最終候補になり討議の上、伝統芸能の能「葵上」ほかの成果で十世片山九郎右衛門氏が決定した。</p>
映画	<p>本年度、映画部門において選考審査員及び推薦委員から推薦された候補者は、文部科学大臣賞候補者として13名、文部科学大臣新人賞候補者として8名であった。第一次選考審査会においては、文部科学大臣賞候補13名について、それぞれの審査員が推薦する候補者の業績、推薦理由について述べ、推薦委員からの候補者については、その業績、推薦理由が事務局から読み上げられた。そして、その業績、推薦理由を基に選考審査員によって議論が交わされ、第一次選考審査会では7名の候補者に絞り込まれた。同様の選考で、文部科学大臣新人賞は3名に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績について、様々な角度、視点から精細に議論され、文部科学大臣賞には、「柘榴坂の仇討」をはじめとして、録音技師として日本映画を支えてきた小野寺修氏と、「鯛ノ記」で重厚な時代劇を演出した小泉堯史氏への贈賞が決まった。文部科学大臣新人賞では、白熱した議論が交わされた結果、「そのみにて光輝く」で深い人間描写で過去作品から大きく成長した呉美保氏に決まった。</p>
音楽	<p>本年度の音楽部門では、選考審査員と推薦委員から、文部科学大臣賞候補者12名、文部科学大臣新人賞候補者10名の推薦があった。第一次選考審査会では、各候補者の活動実績と選考審査員及び推薦委員から提出された推薦理由に基づいて、慎重な論議を尽くした。その結果、文部科学大臣賞候補6名、文部科学大臣新人賞候補6名を第二次選考審査会の対象とすることに決めた。</p> <p>第二次選考審査会では、まず文部科学大臣賞について討議し、候補者が出演した演奏会の内容と社会的反響などに関する活発な意見交換を行った。有力候補者を4名に絞り込み、更に議論を重ねて熟考した結果、文部科学大臣賞については、清元節唄方の清元美寿太夫氏と声楽家の福井敬氏への贈賞が決まった。邦楽と洋楽という分野の違いはあるものの、両名ともに、声の技量の確かさ、作品の内容に即した表現力、観客を魅了する音楽性が高く評価された。続いて、文部科学大臣新人賞について討議し、有力候補者を3名に絞り込んだ。審議を重ねた結果、更なる活躍に期待を抱かせる将来性と実力が認められ、新内節演奏家の新内剛士氏への贈賞が決まった。</p>
舞踊	<p>舞踊部門で選考審査員と推薦委員から推挙された候補者は文部科学大臣賞16名、文部科学大臣新人賞12名であった。内訳は邦舞系12名、洋舞系16名。文部科学大臣新人賞に洋舞系候補者がやや多く見られた。第一次選考審査会で候補者各人について推挙した選考審査員から活動の詳細、評価説明があり、推薦委員からの候補者共々慎重に審議を重ねた結果、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補6名に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では更に議論を深め、活発な討議を重ねてまず文部科学大臣賞に日本舞踊 吾妻流のベテラン舞踊家で清元「玉兎」や同「喜撰(きせん)」に卓抜した素踊りの芸を披露した吾妻節穂氏を決定、もう一人は米セントルイス・バレエ芸術監督で、兵庫県西宮市での「堀内元バレエUSA V」で高い評価を得た堀内元氏が選ばれた。また文部科学大臣新人賞は、新作「十三夜」の振付などに多彩な活動を展開したダンサーで振付家の山田うん氏が決まった。</p>

平成26年度(第65回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補として11名、文部科学大臣新人賞の候補としても11名が挙げられた。第一次選考審査会ではそれら全ての候補者の作品を検討した結果、文部科学大臣賞の候補を4名(小説家3名、俳人1名)に、文部科学大臣新人賞の候補を7名(小説家4名、歌人2名、詩人1名)に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞及び同新人賞の全ての候補作につき選考審査員が順次意見を述べて討議した。その過程で、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞の両方で検討し得る候補者が複数いることが分かったため、両賞を併せて視野に入れながら総合的に検討した。その結果、文部科学大臣賞には、文筆家として長年の実績がある出久根達郎氏による、円熟した味わい深い「短篇集 半分コ」がふさわしいとの結論になった。</p> <p>文部科学大臣新人賞については、仲寒蟬氏の「巨石文明」が、大きな文明論的視野と繊細な抒情とユーモアを併せ持った句集として特に評価され、受賞作に決まった。なお仲氏は実施細則が原則として掲げる文部科学大臣新人賞の対象年齢を若干越えているが、句歴が比較的浅いため、「新人」として顕彰するのがふさわしいとの判断である。</p>
美術	<p>今年度、美術部門において、選考審査員及び推薦委員から候補者として挙げられたのは、文部科学大臣賞15人、文部科学大臣新人賞12人であった。第一次選考審査会においては、各選考審査員の推薦理由と、推薦委員からの候補者については、ジャンルに近い選考審査員から業績についての説明があり、そこから候補者が絞り込まれ、文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞6名が選出された。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会を踏まえて、それぞれの候補者の業績がより踏み込んだ形で説明され、議論が重ねられた。美術部門も、範囲とするところは広く、ジャンルによって、業績とされるものにも違いが出るなど議論となり、慎重に選考が進められた。その結果、文部科学大臣賞には、映像によって新しい表現を切り開いた佐藤時啓氏と、意欲的な作品だけでなく、その展示にも斬新な切り口を見せた中村一美氏が選ばれ、文部科学大臣新人賞には、版築による建築の新しい可能性を広げるだけでなく、東日本大震災やエボラ出血熱など、社会的な事柄へ積極的に関わり続ける齊藤正氏が選ばれた。</p>
放送	<p>放送部門では、選考審査員と推薦委員によって、文部科学大臣賞13名、文部科学大臣新人賞18名が推された。ドラマ、ドキュメンタリー、俳優、脚本、演出、制作と多岐にわたるジャンルで、選考審査会も多彩な意見が出た。結果、第一次選考審査会では文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞、共に5名の候補に絞られた。</p> <p>第二次選考審査会では、ドキュメンタリーとドラマにそれぞれの意見が分かれ、伯仲した討議となった。放送の持つジャーナリズム性と、視聴者の心に与える文化の側面と、双方ともに放送の基盤となる視点であることが、改めて確認された。最後の絞り込みは至難ではあったが、ストーリー性に流されがちな昨今のテレビドラマにあって、脚本本来が持つセリフと人間の形象に独自の領域を持ち、なお喜劇、悲劇とジャンルを問わなく人間を見つめる目に敬意を表して岡田恵和氏が文部科学大臣賞に選出された。文部科学大臣新人賞は、膨大な資料と時間を費やし、明治の足尾銅山を題材に一人の女性の生き様を描いた、田中正氏の粘り強い演出に評価が集中した。</p>
大衆芸能	<p>今年は例年にも増して議論が白熱した。多様なジャンルからなる大衆芸能部門の宿命と言ってよい。文部科学大臣賞は14名、文部科学大臣新人賞は12名からなる候補のうち、第一次審査会での絞り込みを経て、文部科学大臣賞の候補者は選考審査員が推す6名と推薦委員が推す2名の合計8名。一方、文部科学大臣新人賞の方は選考審査員が推す7名が残った。</p> <p>文部科学大臣賞枠は2名。候補者は演芸関係から5名、大衆音楽関係から3名。候補に挙げられた演芸関係の5名といい、大衆音楽関係の3名といい、いずれ劣らぬ人気と実力の持ち主である上、年齢がほぼ同じで、誰に決まってもおかしくないつばぜり合いの中から、二転三転の激論の末、演芸関係からは春風亭小朝氏、大衆音楽関係は山下達郎氏の2名に決まった。</p> <p>文部科学大臣新人賞も議論は沸騰した。演芸関係の4名、活動するフィールドがそれぞれ違う3名のアーティストの計7名の候補者から最終的に選ばれたのは、大阪での独演会が好評で、平成20年度芸術祭大衆芸能部門の新人賞にも輝いた経歴のある桂吉弥氏だった。大衆芸能ならではの間口の広さが議論を生むのだが、それだけに選ばれるのは額面どおりの活躍と実力が評価された結果と言うべきだろう。</p>

平成26年度(第65回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
芸術振興	<p>芸術振興部門では、文部科学大臣賞候補として選考審査員から5名、推薦委員から7名の計12名、文部科学大臣新人賞候補として選考審査員から6名、推薦委員から5名の計11名が、多様な分野にわたって挙げられた。第一次選考審査会では、各候補について、賞の趣旨や、あらかじめ各委員から文書で提示された推薦書、更には各候補の活動を示す詳細な資料等を踏まえ、慎重に審議を重ねた結果、文部科学大臣賞候補、文部科学大臣新人賞候補各3名に候補者を絞り込むに至った。</p> <p>第二次選考審査会では、残された各候補者について、更に慎重に検討を加え審議を行った。その結果、文部科学大臣賞は、「黄金町バザール2014 仮想のコミュニティ・アジア」に、地域に展開するアートの長年にわたるディレクションの結実を示した山野真悟氏に、文部科学大臣新人賞は、「釜ヶ崎芸術大学2014」ほかの活動にやはり多年にわたる活動の実りを示した上田假奈代氏に、それぞれ贈賞することに全員一致の結論を得た。今年度の本部門での文部科学大臣賞及び同新人賞は、いずれも、芸術の多様な現代的可能性を開かせながら、それぞれの場に宿された社会的課題に芸術ならではの在り方で深く関わってきた長年の活動の蓄積の上に今年達成された大きな成果を高く評価しての贈賞となった。</p>
評論等	<p>評論等部門には、読み応えのある力作が集まり、選考は難行した。受賞相当の仕事である多くの審査員が認める候補作から、しかしどれかは外さざるを得ず、苦渋の決断を迫られた。出版事情の変化もあり、五十歳台を越える、規程上は大臣賞の枠で選考することとなる新人が増加していることも、審査を難しくさせたが、今回は何とか軟着陸させたと自負している。ただ、質の高い評論が数多く刊行されていることの確認ができたことは、骨の折れる審査であったこととは別に、審査員一同寿(ことほ)ぎ合えた次第である。</p> <p>選考には、他部門まで含む選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞22名、文部科学大臣新人賞13名の候補が挙げられた。第一次選考審査会では、そこから文部科学大臣賞候補6名、文部科学大臣新人賞5名の著作を選び、ただし候補者によっては文部科学大臣賞と文部科学大臣新人賞を差し替える可能性も含めて吟味の対象とした。そして、第二次選考審査会で、尾崎真理子氏の「ひみつの王国 評伝 石井桃子」と、野村正人氏の「諷刺画家グランヴィル テクストとイメージの19世紀」を文部科学大臣賞、前田恭二氏の「絵のように 明治文学と美術」を文部科学大臣新人賞に、それぞれ選出した。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門は漫画、メディアアート、アニメーション、エンターテインメントデザインなど多岐にわたる芸術分野として、様々な表現様式をベースとした作品や活動実績が審議の対象となる。本年度は選考審査員及び推薦委員により選考対象候補として、文部科学大臣賞候補として12名、文部科学大臣新人賞候補として10名の推薦があった。</p> <p>第一次選考審査会では、今年の活動実績を評価し、これまでの活動実績や今後の当該分野への将来の発展に影響を与えるかなどを総合的に審議し、文部科学大臣賞3名、文部科学大臣新人賞4名に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、今年の作品や活動業績の内容を更に吟味し、これらの業績が作家を表す最上のものと評価した上で、メディア芸術分野の表現領域全体においてふさわしい実績について慎重にかつ、白熱した議論を行った。</p> <p>その結果、文部科学大臣賞には「明るい部屋」としてメディアアートの技術や表現により分野を横断するメディアインスタレーション作品を創作し、また、それらを芸術表現フィールドのコラボレーションステージとして発表活動をした業績から高谷史郎氏を選出した。文部科学大臣新人賞には、豊かな人物表現と忍びの世界観を巧みにストーリー展開するバトルアクション漫画として、平成11年から週刊漫画誌に連載し今年エンディングした「NARUTO-ナルト-」を制作した岸本斉史氏を選出した。</p>

芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日
文化庁長官裁定
一部改正 平成11年 5月13日
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年 12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家，演出家，演技者，舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家，脚本家，撮影者，演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家，指揮者，作曲家，演出家，舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家，演出振付家，舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家，翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家，演出家，演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家，作曲家，演出家，演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家，文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は，文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は，特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので，各部門2名以内（ただし，放送部門，芸術振興部門，メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は，新人の芸術家（個人）を対象とするもので，各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については，原則として対象としない。

4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は，毎年，原則として1月中に行うものとし，選考の対象となる業績は，主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては，これまでの業績に加え，将来性，年齢，他の受賞歴等も勘案して選出する。

5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い，受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため，各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け，選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門，芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家，専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日
文化庁次長決裁
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のことに留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
- (2) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
 - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
 - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

平成26年度(第65回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】		【放送部門】	
大島 幸久	演劇ジャーナリスト	浅野 加寿子	前NHK放送博物館館長, プロデューサー, 放送評論家
亀岡 典子	産経新聞大阪本社文化部編集委員	池端 俊策	脚本家
河合 祥一郎	東京大学教授	音 好宏	上智大学教授
酒井 誠	川崎市アートセンター演劇ディレクター, 武蔵野音楽大学講師	杉田 成道	日本映画テレビプロデューサー協会会長
宮辻 政夫	演劇評論家	鈴木 嘉一	放送評論家
村上 滉	明星大学教授	林 真理子	作家
渡辺 弘	(公財)埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長	八木 康夫	(株)TBSテレビ執行役員
【映画部門】		【大衆芸能部門】	
安藤 紘平	早稲田大学名誉教授, 北京電影学院各員教授, 映画作家	小倉 エージ	音楽評論家
掛尾 良夫	城西国際大学メディア学部教授	上沼 真平	テレビプロデューサー
川島 章正	映像編集技師	中村 真規	演芸プロデューサー
北川 れい子	映画評論家	松尾 美矢子	フリー演芸ライター
滝田 洋二郎	映画監督	油井 雅和	毎日新聞記者
野村 正昭	映画評論家	悠 雅彦	淑徳大学公開講座講師
宮澤 誠一	日本大学芸術学部映画学科教授	渡邊 寧久	演芸コラムニスト, 民放ウェブ媒体エンタメ編集長
【音楽部門】		【評論等部門】	
白石 美雪	武蔵野美術大学教授	礪山 雅	国立音楽大学招聘教授, 大阪音楽大学客員教授
谷垣内 和子	(公社)日本芸能実演家団体協議会実演芸術振興部企画室長	井上 章一	国際日本文化研究センター教授
中村 孝義	学校法人大阪音楽大学理事長	尾形 敏朗	映画評論家
野川 美穂子	東京芸術大学講師	川村 湊	法政大学国際文化学部教授
堀内 修	音楽評論家	鈴木 杜幾子	明治学院大学名誉教授, 美術史学者
三宅 幸夫	慶應義塾大学名誉教授	三浦 篤	東京大学大学院総合文化研究科教授
山川 直治	日本音楽研究家	水落 潔	演劇評論家
【舞踊部門】		【芸術振興部門】	
尼ヶ崎 彬	学習院女子大学教授	明智 恵子	キネマ旬報編集長
池野 恵	舞踊評論家	伊藤 裕夫	日本文化政策学会会長, 元富山大学教授
稲田 奈緒美	舞踊評論家	片山 正夫	(公財)セゾン文化財団常務理事
織田 紘二	独立行政法人日本芸術文化振興会顧問	小林 真理	東京大学准教授
西村 彰朗	演劇評論家	佐藤 信	座・高円寺芸術監督, 劇作家, 演出家
平野 英俊	舞踊評論家	長田 謙一	名古屋芸術大学大学院美術研究科・美術学部教授
本多 実男	(公社)日本バレエ協会理事, 劇団四季・チャコットバレエ教師, J.Honda Ballet主宰	野平 一郎	東京芸術大学教授
【文学部門】		【メディア芸術部門】	
川上 弘美	文筆業	阿部 一直	(公財)山口市文化振興財団山口情報芸術センター副館長
佐佐木 幸綱	歌人	岩谷 徹	東京工芸大学教授
篠田 節子	小説家	木幡 和枝	アートプロデューサー, 東京芸術大学名誉教授
高橋 一清	(一社)松江観光協会観光文化プロデューサー	里中 満智子	マンガ家
沼野 充義	東京大学大学院人文社会系研究科教授	関口 敦仁	美術家, 愛知県立芸術大学教授
正木 ゆう子	俳人	細萱 敦	東京工芸大学教授
松浦 寿輝	作家, 東京大学名誉教授	横田 正夫	日本大学教授
【美術部門】		【部門内五十音順】	
榎本 徹	岐阜県現代陶芸美術館長		
遠藤 彰子	美術家, 武蔵野美術大学教授		
金子 隆一	東京都写真美術館専門調査員		
栗生 明	千葉大学名誉教授, (株)栗生総合計画事務所代表取締役		
島谷 弘幸	東京国立博物館副館長		
須藤 玲子	東京造形大学教授		
新見 隆	武蔵野美術大学芸術文化学科教授		
松本 透	東京国立近代美術館副館長		
山脇 佐江子	神戸大学文学部・金城学院大学非常勤講師		
横山 勝彦	金沢美術工芸大学大学院専任教授		

平成26年度(第65回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
井上 桂	水戸芸術館演劇部門コーディネーター	秋山 孝	多摩美術大学教授
太田 耕人	京都教育大学副学長, 同大教育学部英文学科教授	五十嵐 卓	損保ジャパン日本興亜美術館学芸課長
大谷 節子	神戸女子大学教授	太田垣 貴	美術評論家, 京都嵯峨芸術大学非常勤講師
小玉 祥子	毎日新聞社学芸部編集委員	大橋 修一	埼玉大学教授
七字 英輔	演劇評論家	加藤 弘子	東京都現代美術館学芸員
立花 恵子	演劇評論家	川浪 千鶴	高知県立美術館企画監学芸課長
伊達 なつめ	演劇ジャーナリスト	楠見 清	首都大学東京システムデザイン学部准教授
萩尾 瞳	映画・演劇評論家	清水 美三子	女子美術大学教授
林 尚之	日刊スポーツ新聞社文化社会部編集委員	外館 和子	美術評論家, 愛知県立芸術大学・名古屋芸術大学兼任講師
古井戸 秀夫	東京大学教授	内藤 廣	建築家, 東京大学名誉教授
【映画部門】		中ハシ 克シゲ	京都市立芸術大学美術学部教授
梅津 文	GEM Partners株式会社代表	林 洋子	大原美術館特別研究員
襟川 クロ	映画パーソナリティー	水野 学	(株)グッドデザインカンパニー代表取締役, クリエイティブディレクター
青木 眞弥	株式会社キネマ旬報社編集本部本部長	三田村 有純	東京芸術大学美術学部教授
大高 宏雄	映画ジャーナリスト, 文化通信特別編集委員	森 仁史	金沢美術工芸大学柳宗理記念デザイン研究所所長
大前 和美	日本映画テレビ技術協会特別顧問	安来 正博	国立国際美術館主任研究員
近藤 孝	読売新聞大阪本社文化・生活部記者	山本 直彰	武蔵野美術大学特任教授
坂野 ゆか	(公財)川喜多記念映画文化財団チーフコーディネーター	【放送部門】	
樋野 香織	神戸アートビレッジセンター映像部門主担当	石井 彰	放送作家
山名 泉	高島平ドキュメンタリー映画を見る会主宰, すかがわ国際短編映画祭実行委員	岡室 美奈子	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長, 同大学文学学術院教授
吉田 馨	大阪大学招聘准教授	加賀美 幸子	千葉市男女共同参画センター名誉館長ほか
【音楽部門】		雑崎 徹	朝日新聞東京本社文化くらし報道部部長代理
岡田 暁生	京都大学教授	旗本 浩二	読売新聞文化部記者
岡部 真一郎	明治学院大学教授	中町 綾子	日本大学芸術学部教授
小畑 恒夫	昭和音楽大学教授	樋口 尚文	映画評論家, 映画監督
小鍛冶 邦隆	東京芸術大学音楽学部作曲科教授	藤田 真文	法政大学社会学部教授
國土 潤一	音楽評論家	古崎 康成	テレビドラマ研究者
齋藤 裕嗣	東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員	森 治美	脚本家, 森組芝居(旧・森組)主宰
下野 竜也	読売日本交響楽団首席客演指揮者	【大衆芸能部門】	
高畠 整子	邦楽ジャーナリスト	今岡 謙太郎	武蔵野美術大学教授
竹内 有一	京都市立芸術大学准教授	大友 浩	演芸研究者, 文筆家
塚原 康子	東京芸術大学音楽学部楽理科教授	荻田 清	梅花女子大学教授
【舞踊部門】		金森 三夫	フリーライター
阿部 さとみ	舞踊評論家	川崎 浩	毎日新聞社専門編集委員
飯塚 友子	産経新聞東京本社文化部記者	佐藤 友美	東京かわら版編集長
上野 房子	ダンス評論家	布目 英一	演芸研究者
古賀 司郎	(公社)日本舞踊協会事務局長	萩原 健太	音楽評論家
新藤 弘子	舞踊評論家	古川 綾子	上方演芸研究者, 近畿大学非常勤講師
立木 燐子	舞踊評論家	村井 康司	音楽評論家, 尚美学園大学講師
中川 俊宏	武蔵野音楽大学教授	【メディア芸術部門】	
長野 由紀	舞踊評論家	伊藤 ガビン	編集者, クリエイティブ・ディレクター
水落 宏	舞踊評論家, (公財)日本舞踊振興財団前エグゼクティブプロデューサー	小黒 祐一郎	アニメスタイル編集長
守山 実花	尚美学園大学非常勤講師, バレエ評論家	小野 憲史	文筆業
【文学部門】		神谷 英樹	ゲームデザイナー
小池 光	仙台文学館館長	小出 正志	東京造形大学教授, 日本アニメーション学会会長
紅野 謙介	日本大学文理学部教授	小杉 美穂子	美術作家, 京都精華大学・帝塚山学院大学非常勤講師
栗木 京子	歌人	椎名 ゆかり	翻訳者, 東京芸術大学非常勤講師
齋藤 恵美子	詩人	寺井 弘典	(株)ピクス取締役, 多摩美術大学情報デザイン学科特任教授
澤 好摩	俳人	八谷 和彦	東京芸術大学美術学部准教授
鈴木 貞美	国際日本文化研究センター名誉教授	みなもと 太郎	漫画家, マンガ研究者
辻原 登	小説家		
十重田 裕一	早稲田大学教授		
宮部 みゆき	小説家		
宮本 輝	小説家		

【部門内五十音順】